

CAPNA

キャプナ★ニューズレター

設立8周年を迎えたCAPNAの2003年度定時総会が6月1日、名古屋市東区のウィルあいちで開かれました。

この日は、初代理事長・祖父江文宏さんの1周年忌。大きな写真パネルが飾られた壇上で、岩城正光理事長、白石淑江副理事長が、この1年の取り組みを紹介し、虐待防止への思いを新たにしました。(写真)

また、新理事6人が承認され、理事会は25人の体制となりました。

記念イベントは、CAPNA劇団と大阪大学の西澤哲助教授による「阿闍世(アジャセ)―理知と分別が生むもの」。

子どもの虐待とその連鎖を、釈迦の時代の物語から読み解こうとした祖父江さんの脚本をもとに、CAPNA劇団が三つのハイライトシーンを上演。生前の祖父江さんと「アジャセ」の世界を語り合ってきた西澤さんが、父王を殺害したアジャセ王子、それをし向けたダイバダッタなど主要人物の言葉と行動に見事な解説を加え、会場を魅了しました。



Vol. 29

心の中に生きる「園長すけ」

4月のCAPNA市民講座は、予定していた村井航さん(メーテレカメラマン)が、新城の誘拐事件のために延期となり、暁学園の園長・菱田理さんに代役を務めていただきました。



祖父江さんの後継者である菱田さんは、「園長すけ」の思い出を交えながら、子どもたちを支える施設の取り組みを語りました。

施設で起きた暴力事件の後、辞表を出そうとした菱田さんを祖父江さんが温かく包み込んだこと、「死に顔を必ず子どもたちに見せてやってほしい」と言い残したことなどのエピソードを紹介し「今も、私や子どもたちの心の中に、園長すけは生き続けている」と締めくくりました。

6月の市民講座は、26日午後6時30分から名古屋市女性会館で。講師は、村井さんです。お楽しみに。

新体制でがんばります

6月1日の総会で、新理事6人が承認され、以下の29人による執行部がスタートしました。弁護士5人、医師2人、大学教員6人、電話スタッフ7人など、多彩な顔ぶれです。岩城理事長のもと、明るさと行動力をモットーに活動していきます。応援をよろしくお願いします。

特定非営利活動法人子どもの虐待防止ネットワーク・あいち役員

- 理事長 岩城正光
副理事長 白石淑江
事務局長 田島淑子
監事 川上明彦、谷ロアキ、山口幸男
専務理事 兼田智彦
常務理事 安藤明夫、井上薫、上野美子、加藤悦子、山田裕子
理事 岡千弘、岡田尚子、柿本里佳、菊島正雄、桐井弘司、隈元眞理子、小久保裕美、塩見明美、高橋直紹、高橋昌久、多田元、新田美津子、林恵美子、水野正三郎、菱田理、矢満田篤二
専従スタッフ 山下 美紀

ご寄付

【団体】名南ロータリークラブ、聖心会名古屋修道院、(株)ウスイ

【個人】稲生みち子、向山富雄、稲子宣子、高橋昌久、藤井宣行、岩城正光、鈴木美哉子、野村孝行、鴨伸子、前本好江、服部恵子、伊藤純子、服部高子、池山尚子、大久保素子、橋村真知子、長村秀勝、安藤明夫 ほかに匿名の10人の方々。(順不同 敬称略4月1日～6月13日)

CAPNAニューズレター29号 (隔月刊13号)

2003年6月20日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

アジャセ 「阿闍世」燃える！

「朗読劇って、こんなに深いものなのか」一客席から、ため息が漏れました。CAPNA劇団が総力で取り組んだステージ。劇の舞台は、釈迦が生きていた2500年前のインドですが、登場人物たちの一つ一つの言葉が現代社会につながり、親子の愛憎、苦悩と救済を問いかけてきました。ハイライトの3つの場面の合間に西澤哲さんの解説を挟み込んだ試みも、観客の皆さんの理解を深めるのに効果的で、大成功でした。感動を呼んだ朗読劇の舞台裏を紹介します。

【場面1】父王との間に、埋められない溝を感じていたアジャセ王子。それにつけこんだダイバダッタは、生まれたばかりのアジャセが父に殺されかけたという出生の秘密を漏らし、父王を殺して王位を奪うことをそそのかす。「そうか、みなが私を見る憐れみの視線は、それだったのか…許せん！」一衝撃を受けたアジャセは、ダイバダッタの術中にはまる。

主役・アジャセを演じた高橋昌久さんは、豊田市で開業する小児科医で、スクールカウンセラーも引き受けつつ、豊田虐待防止ネットワークの中核を務める超多忙の人。「ちよっと練習するだけだから」と甘い言葉に誘われ、出演を引き受けたために、「地獄」の日々が待っていました。

演出の今村志穂さん(ペンネーム)は、祖父江さんの二男で、演劇関係者。この第一幕では、アジャセの衝撃と怒りの表現について、緻密な役づくりが行われました。

間の取り方、姿勢、語尾の上げ下げ。一つ一つの言葉を理解し、アジャセの心理をたどりながら、劇の世界を崩さないように朗読するのは大変なこと。高橋さんは週一回の合同練習だけではなく、自宅でも熱心に朗読練習を続け、目ざましい進歩を遂げました。

「兵を集めろ！手向かう者は殺せ！」一腹の底から大声を出す練習に、お子さんはびっくりして怖がったそうです。



アジャセ王子を熱演した高橋さん

【第2幕】ダイバダッタと弟・アナンとの会話から、ダイバダッタの不幸な生い立ちが明らかになる。冷静なアナンは、釈迦教団に反旗を翻した兄の暴挙をたしなめつつ「あなたは愛を知らずに育った子だから、アジャセ王子の心をつかむことができたのだ」と言い切る。ダイバダッタは「同情などで私をさげすむな」と激高する。

アナン・安藤雅範さん、ダイバダッタ・岩城理事長は、ともに弁護士。「静と動」のコンビネーションが見事でした。今村さんから指摘を受けるたびに律儀にメモを取っていた安藤さん。役どころをきっちりつかんで、抑制の利いた名演でした。

一方のダイバ岩城さんは「はまり役」ともつばらの評判。したたかな悪党でいながら、寂しさ、もろさを感じさせる男を熱演しました。祖父江さんはきっとステージのどこかで、微笑んで観ていたことでしょう。



本番に向けて毎週1回の練習は、息詰まる雰囲気だった

苦悩、愛憎、心の救済・・・ 猛練習で役柄をつかむ



朗読劇の会話の意味を掘り下げる西澤さんの講演に、出演メンバーも魅了された

【場面3】父王を殺し、母イダイケを幽閉したアジャセ。しかし、イダイケの告白によって、アジャセは父王が自分を深く愛していたことを知らされ、動揺する。そんな姿に、ダイバダッタは「さらばだ。アジャセ。お前は悪を積み上げて正義と成すには弱すぎる」と言い残して去る。慚愧の思いの中で、アジャセは、天の声に励まされ、死を目前にした釈迦に救いを求めて旅立つ。その天の声の主は？「あなたは…父上！」

イダイケの悲しみを見事に表現したのは、祖父江美智子さん。前日に一周忌法要を済ませたばかりでしたが、その疲れも見せず、張りのある声を場内に響かせました。

また、哀愁を帯びた横笛で劇を盛り上げた芳原洋一さんは「祖父江さんの劇をやるなら、俺が出なくちゃ」と滋賀県から立候補しての出演。祖父江さんの脚本のエッセンスをまとめた加藤悦子さんは、練習場所の確保にも奔走しました。

「阿闍世」は決して一般受けする劇ではありません。しかし、祖父江さんが描いた世界を、一人でも多くの人に紹介したいという思いが結集し、印象深い舞台となりました。

そして、西澤さんがいなければ、この企画が日の目を見ることもなかったでしょう。アジャセの物語から児童虐待の本質を読み取ろうとしたのが祖父

江さん。その議論の相手を務めてきたのが西澤さん。要所を押さえた解説によって、役者たちも一段と気合が入ったようです。

西澤さんが特に注目したのは、ダイバダッタの描き方。もともとの物語の中では、わき役的な扱いで、これほど思い入れを込めて描写しているのは祖父江さんの脚本だけ。ダイバダッタの怒りや反逆行動の中に、被虐待児の姿を見たのでは、と西澤さんは語っています。

救済されるのは、アジャセだけではない。そんなメッセージが伝わってきます。



西澤 哲さん